
けいおん！ ~マネージャー物語~

睡魔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん！～マネージャー物語～

【Zコード】

N8375S

【作者名】

睡魔

【あらすじ】

唯璃「このお話は、必要性を疑われる軽音部のマネージャーと、その婚約者を中心としたハートフルラブコメディです！」 僕「あれ？ そうだけ？ 何か違う気が……」 唯璃「？ どこが違うの？」 僕「これは僕を主役にしたホラーだった気が……」 唯璃「あ、そうだったね。勘違いしてたよつ」 澄「違うだろ！ 軽音だろ！」 僕「な、なんだつてー！」 現時点では出てきません。

第〇曲 まゝひと哲学博士と書ひて頭がいこよひに見せてみる（前書き）

連載をもう一つ増やしてみたなう。

第〇曲皿 ひよひと皿皿こじと皿ひて頭がこころひと見せてみる

僕はまづ、断言しておひづと皿ひ。

並行世界は存在しない、と

なぜ、僕がこいつこいつと宣言こいつかと考えた経緯を説明しようと思ひ。

この物語は、こいつより最早物語とも言えないほどの平和すぎる日常を語つていく上で、僕は焦点を当てられるべきではなかつたんだ。もつと、別の人へやるべきだつたんだ。

そう言つても僕が語つていくことは既に決定していぬことだからもつ曲がらない。

『決められて、定められた』のだから、もつ曲げられない。

僕なんかじや、曲げられない。

もし、世界を一つの大きな意思と考えるのなら、その大きな意思が『決めて、定めた』のだから、もつ曲げよつとも思わない。

でも。

そんな一つの大きな意思がこの世界について語つたのなら、どんなスケールになるのかは分からない。

だから意思は考えた。

その結果、意思以外のさまざまなものに語らせた。

この場合は、僕。

言えるのなら文句の一つも言つてやりたいが、もつ決まつたらしいので、意思が考えた物語の登場人物にすぎない僕にはもつどうすることもできない。諦めるしかない。

さて。

そんな過去のことは置いといて。

僕の最初の宣言について話そつ。

なんのことは無い、そのままの意味だ。

確かに、いろこわな世界はあるのかもしぬない。

だけじゃねーほーつとして並行してほーない。
だけど、交わりもしない。

言ひのなーり、ねじれ。

つて、こんなことを考えるのは野暮つてもんか。
まあ、あらかじめ言つておくと、

僕は僕であり、ぼくでは無い。

意味は理解しなくてもいい。

でも、もし僕をぼくだと思つていいのなーり。
そんな考え即座に捨てることを推奨する。
僕はあんなに立派ではないし、あんなに堕ちて無い。
何より、僕に代用品は要らない。

じやあね、僕。いや、ぼく。
さて、言つたいたいことも言つたいたいこも、この辺でおしまいにしてつかな。

第1曲目 なぜプログラミングにならなかつたのかと思つと残念で仕方がない。本当に

連続投稿なう

第1曲目 なぜブランにならなかつたのかと思つと残念で仕方がない。本当に

この僕が桜ヶ丘高校に入学して2日目になった。

今年から共学化したこの高校は、僕の家の近くにあり、通いやすいという点に特化している。この点で得をするのは僕の家族だけだろうけど、他にも家が近い者はいるのかもしれない。しかし、そんなことは僕との関係性は絶無といつても過言ではないので、端にでも置いておくことにする。

さて。今、僕の家族と言つ言葉が出できたので、いい機会だからこじで語つておこうと思う。

僕は五人家族で、父、母、姉、僕、妹、という構成だ。

まず、僕の両親についてだが、一言でいえば、ただの旅行好きだ。今も家にいない。はつきり言って、今どこにいるのかも分からぬ。いつからいなかつても分かるかも分からない。いつになるとかも分からない。いつになるとかも分からない。これだけ聞くと、記憶に障害があるのかと思われるが、決してそうでもない。この僕でも、いくら中学生の頃のテストで全教科0点というふざけているとしか思えない結果をとつた（ふざけていたのならまだいいが、自分なりに眞面目に書いて、解答欄も全部埋めて、よしこれなら行ける！と思つて出した結果がこれなのだから、救われない）この僕でも、自分の興味ある事くらいは覚える事が出来るし、人の名前は忘れない。と思う。しかし、両親がいつも出て行つたのか、という事象に関しては何も覚えていないのだから不思議だ。これは僕以外の家族、つまり姉と妹にも共通する。実は両親は超能力者で、出て行く時の記憶を消したんじゃないのかという結論で自分を納得させている。無理矢理すぎるけど。

次に妹は、これはまたできた奴で、気配りは出来るわ、面倒見はいいわで、両親が欠けている我が家の家事を一手に引き受けている。手先が器用なので、なんでもそつ無くこなし、勉強面に置いても特に問題はなく、さらに美少女、という完璧超人よろしくな人

間としてのスペックの高さを誇っている。僕とは対極に位置する人間だ。たまに傷なのは、周囲からの評価がシスコン気味であるという事。僕的にはシスコン気味、ではなくて完全にシスコンだと思っている。なぜブラコンにならなかつたのかと思うと残念で仕方がない。本当に。

次は、というか最後はそのシスコンの対象である僕の姉について。僕と姉は同じ年である。両親が一年のうちにがんばっちゃつたのかと言われば、そうではない。僕と僕の姉は俗に言う双生児、というやつある。簡単に言えば双子だ。しかし、姉の方が少しばかり早く産まれたがために、今僕はここで弟をやっているという訳だ。通常、男女の双子というのは、普段双子の例として用いられるそつくりさん的なわゆる一卵性双生児ではなく、それとはまた違う種類の一卵性双生児というものである。僕たち姉弟も例によつてそうだ。故に僕と僕の姉はそれ程似ていない。姉は、世間一般的に可愛い部類にはいると思う。僕がシスコンだとか、身内のエゴを差し引いてもだ。だが、それとは反対に、僕はそんなにパツとしない。ときどき、神様の理不尽さを感じる事がある。姉妹共に美少女であれば、とうぜん血の繋がっている僕も注目されるに決まつて。そして実物をみて、ああ……となつた事が何度あつただろうか。今はもう慣れてしまつたが、出来れば一生慣れたくなかったものである。今となつては手遅れだが。そんな僕の姉がこの家のヒエラルキーの頂点に君臨している。別に威張つてている訳ではなく、結果的にそうなつてしまつたのだ。あの良く言えば穏和、悪く言えばマヌケ、擬音で表すとぼわぽわな性格が起因しているのではないかと、僕は考える。確かにあの性格には癒される事も多い。妹がシスコンになるのも分かる。実際僕も中学生時代（と言つても高校に入学してまだ一日だが）には級友からシスコンと呼ばれていたこともあつた。僕と姉は双子なので、もちろん同じ学年に所属している。となると、家でも学校でも顔を合わせる機会がある、ということだ。そんな人が目の前で、あの良く言えば穏和、悪く言えばマヌケ、擬音で表す

とほわほわな性格でおおおおしていいるのを見かけたら家族であろうとなからうと助けようと思つてしまつに違ひない。血のつながりからか姉が良く僕に助けを求めることがあつた。それで弟である僕が助けたので、周囲からはシスコンといつ認識を受けていた。周囲が実際にはどう思つていたのかは知らないが、僕はそういう風に理解していた。しかし、学年全体がそういうのを気にしなかつたし、それをネタに虐められるところのも無かつたので、このことに関しても特に気にしていない。しかし、僕にはシスコンといつ噂が立ち、姉にはブラコンといつ噂が立たなかつたのはなんなのだろうか。顔か。

とまあ、長々とだらだらと家族のことについて語つたところで、話題を学校に戻そうと思つ。この高校は、去年まで女子校であつたという事もあり、圧倒的なまでに男子の数が少ない。『見晴らしの良い草原、ただし四面楚歌』みたいなつ！ とでも叫びたくなるほど男子が少ない。この高校に入学する男子といえば、今年から共学化という事実に興味があるやつか、この僕や姉みたいに家から近いやつか、はたまた男子が少ないからハーレム作れるぜやつほー！ という浅はかなアホくらいなものだう。その浅はかなアホが僕の友人のうちの一人なのだが、嘆かわしくて仕方ない。ちなみに、その友人は今日は休んでいる。一日目から休むとかどんなどよとか思つたりするが、そう思つたところで彼が休んだという事実には変わりないし、ならば脳の容量の一部をあの浅はかでアホで嘆かわしいやつに使うよりは、もっと別のぼくにとつて有意義な事に使おうと思つ。

ここで高校、いや、学校という教育機関全体についての話をしようと思つ。普通、学校というものには学年といつ年齢によつて区切られた区別の方法がある。幼稚園なら年少、年中、年長。小学校なら一年生から六年生。中学校、高校なら一年生から三年生。大学なら一年生から二年生、四年生または六年生、といつよつに。まあ、義務教育が終わると留年といつものがあるので、年齢によつて

分けられていくとは一概には言えないが。

話を戻そう。これまた普通の事なんだが、同じ学年に血縁者がいる場合には同じクラスにならない、というのが基本である。僕はまだ高校生のそれも一日目なので、先生達の詳しい事情は分からぬけど、何があるんだろう、きっと。

「うーん、部活かあ。どうしようかなあ…」

ここまで普通の学校について僕が心の中で一人で議論してきました訳だが、その議論は今の僕の着いている席と、いま僕の目の前の人気が着いている席、この二つによつて無意味となつてしまつ。

「ねえねえ、ゆうたん。部活、何がいいと思う?」

知らんがな。

この人は唯さん。正真正銘、僕の双子の姉だ。世の中に絶対は無いと言う人がいるが、僕と姉さんの血縁だけは絶対だと言い切れる。

小学校低学年の頃だったと思う。僕が母さんに「僕とお姉ちゃんはきょーだいなの?」と聞いた事がある。特に理由もなく、自分の語彙が増えてきたので、それを使ってみたかっただけだと思うのだが、それを聞いた母さんは「そうよ」と優しく微笑んで何処からビデオを持ってきて僕に見せた。そこに録画されていたのは、父さんが撮つたらしい僕と姉さんの産まれる時の映像だつた。それが予想外にグロテスクで、子供心に恐怖したのを今でも覚えていると、そんなどうでもいい話は置いといて。

そんな僕の記憶にも戸籍上でも完璧な双子の姉弟である僕たちを同じクラスに放り込んだ時点で、この高校は『普通では無い高校』に僕の中で認定されてしまった。はい、拍手。パチパチ。

この高校のどこが普通じゃ無いのかは僕のこの三年間の中で理解していくとして、姉さんと同じクラスっていうのはなあ。嫌じや無い、それどころか嬉しいんだけどなあ。僕が姉さんを介護、もとい補助していかなきやならないのか。それはメリットもあるし、デメリットもある。

姉さんを助けていると、あのほわわんとした笑顔を近くで常に眺める事ができる。それだけで、その日の疲れが吹っ飛んでしまう。

「なに？ シスコン？ なんとでも言つてくれ。

しかし、常に姉さんが僕の近くにいる事で、周囲からシスコンのという認識を受けてしまう恐れがある。僕としてはなんら困る事は無いのだが、例えばもし、僕のことが好きな女の子がいて、勇気を出して告白しようとしても、常に姉さんが僕の側にいる事によって「私が入る隙間は無いかな」と言つて諦めてしまう事があるかもしれない。僕を好きな女の子がいれば、だけど。ここには僕の希望も入つていて。そうすると、僕の輝かしいこれから高校生活において女の子成分がじつそり抜け落ちてしまつかもしない。それは、ちょっと、というか、かなり、嫌だ。

……まあ、どうにかなるか。プラス思考、プラス思考。

「ねえ、ゆうたん。聞いてる？」

僕の顔を覗きこむようにして聞いてくる姉さん。

「部活、なにがいいと強いつ？」

高校での自分の恋愛について考えていた脳を、姉さんの話に切り換える。

部活、部活ねえ。正直言つて僕も迷つてる。部活選びは高校三年間を決めると言つても過言では無いから、慎重に選ばないと駄目だ。とは言つてもやりたい事が無い。でも時間はあるし、じつくり考える事にしよう。

「まだ時間もあるし、ゆっくり考えれば？」

僕はそう、無難に返しておいた。

僕はまっすぐ帰宅した。と言つより帰宅中だ。

今日はまだ新学期一日目なので授業というより午前中が全てHRで潰れて終わる。学生である僕としては嬉しい事この上ない。帰り際に聞いた「明日から授業が始まる」という言葉は嘘だと信じたい。出来る事なら一生。

話が変わるが、寝坊が日課である僕は、朝ご飯というものを食して来てはいない。毎朝、完璧超人な妹さんが作ってくれているのだが、食べる時間もなく家を出て来てしまう。ここ数年間そんな生活を続いているのだけど、文句一つもなく朝食を作ってくれている妹はすげいと思う。

で、そんな状況なもんだから昼頃にはお腹がオーケストラ並みの音を奏てる。畠袋のパイプオルガンやあ。意味が分からなくな。

腹が減つては戦ができぬ、という言葉があるようにせつかく午前中に学校が終わってもお腹がすいていては遊ぶ気がしない。まづは腹ごしらえだ、といつ事で教室でぼーっとしている妹さんを置いて一日散に教室から出てきた。

「つと、もう着いたのか」

さすがに志望理由に選んだだけあって、学校から我が家まで10分もかからずに着いた。

カバンの中から鍵を取り出し、鍵穴に入れたところどうと思う。

あれ？ 今日中学校つて午前中で終わりだっけ？ もしそうで無いとすれば、今家の中に料理ができる人がいないことになる。そしたら昼食どうしよう。もちろん、妹に家事を任せっきりな僕も姉さんも家事スキルはゼロなので、自分で何か作るという案は即行で却下される。もしかしたら冷蔵庫の中に作り置きの何かがあるのかもしれないが、ぼくも曲がりなりにも成長期真っ盛りな男の子な訳で、作り置きで食欲が十二分に満たされるとは考えにくい。そもそも作り置きしてないのかもしれない。外で何かを食べるという事

も出来ない事もないが、家の中に入りカバンをおいてくつろいだ瞬間に、入学直後の独特な緊張感と空腹によって肉体的にも精神的にもライフがゼロになつた僕の体がそう簡単に言つ事を聞くとは思えない。これは姉さんにも言える事だ。姉さんの場合はいつものことだけど。

そうすると、妹が中学校から帰つてくるのを待つしか無い事になる。だがしかし、現時点でピークに達している僕の空腹度合いであと数時間我慢出来るだらうか？ いや、できまい。これは反語を使うほどまでに強調すべきことだ。もしかしたら姉さんがそこまで空腹ではなくて、頼んだらどこかで何かを買っててくれるかもしない。しかし、その可能性は絶無だ。あの食べ物大好きな姉が空腹ではない、なんてそんなことはあり得ない。今ここに矢が降つてくるくらいあり得ない。それに、あの姉を一人で買い物に行かせるなんて言語道断だ。半袖で冬の山に登るのと同義だ。だとすれば、この先に待ち受けているのは少なくとも良い事ではない。と言つ事はあれか、姉弟揃つて餓死か。新聞に載るかな？ それなら一面に大きく載せて欲しいな。

などと自分の行く末を考えつつ（その割には楽観的に）、鍵穴に刺したままの鍵を回す。もちろん、鍵は閉まつていた。ここで開いていたら泥棒さんが入つている事になる。それは勘弁して欲しい。ただでさえあんな姉を持つて毎日が騒がしいのにこれ以上の面倒じとなんてごめんだ。

僕がドアを開けて、玄関で靴を脱いでいると「お姉ちゃん、お兄ちゃん、おかえり～」と声が聞こえた。よかつた、帰つてた。これで餓死しなくても済む。新聞に載れないのは残念だけど。

と、戯言めいたことを心の中で吐きつつ、リビングのドアを開ける。そこでリビングと一体化しているキッチンで料理らしき事をしている妹に声をかける。

「ただいま、憂」

「おかえりお兄ちゃん。もう少しで出来るからちょっと待つてね」

そう笑顔で答えたのは、我が妹の憂。前にも説明したが、この家の家事を全て引き受けている。もつすばらしすぎて涙が出やうだ。僕や姉さんは大違ひだ。ちなみに、こんな妹のおかげで正月などはこたつから出なくて済むという日本人にとつては最上の幸福と言つても過言ではない環境でいられるのだ。感謝感謝。キツチンからは香ばしいソースの匂いと、じゅー、という焼けるような音がしてくる。うーん、察するに今日は焼きそばか。確か昨日はお好み焼きだつた気がする。ソースの消費量多いな。

「あれ？ お兄ちゃん。お姉ちゃんは？」

憂が質問してきた。その時にちょっと首を傾げたのが実にかわいらしい。もー、食べちゃいたい！ 実際にやつたら犯罪で捕まつちやうからやらないけど。

つと、それより姉さんか。確かに、僕はお腹が異様に空いていたので、いつもは一緒に帰つている姉さんを放つて足早に教室を出たはづだ。教室を出る時に呼び止められた気がしないでも無いけど、空腹状態の僕に他人を気にするというスキルは付いていない。

もしかしたらあの姉の事だから、道に迷つて家に辿り着けないかもしない。いつも（と言つても一日間だけだが）登下校の時は僕にくつついて歩いている姉さんが道を覚えているはずがない。途中で道を覚える努力をしていれば良いのだが、僕が見ている限りそんな様子は微塵も感じられない。なんかいつも、ほけー、としている。そんなところがまたかわいい、とシステムの僕は思う訳だ。

「すぐに帰つてくるよ」

僕の思考を簡素に、そして簡潔にまとめて憂に伝えておいた。どこをどうしたらそうなるのか、些か僕自身も自分の脳の思考回路に疑問を持たざるをえないが、しかしここには『憂を悲しい日に会わせてはいけない』といつ僕の座右の銘とも言える信念が深く関係している。

もしここで本当の事を言つたら、憂は即座にパニックに陥るだろう。そりやそつだよな。あの姉が何事も無く無事に帰つてくる

とは思えないもんな。下手したらここで泣き出してしまうかもしない。憂の泣き顔を見るのは嫌だから、本当の事は言わない。

なに？ 嘘はいけないって？ 嘘も方便って言ひじやないか。

君。

「そりいえば、この家に一人きりって相当久しぶりだな」「え？」

僕は思つた事を口に出す。

いつもこの家には姉さんがいたからなあ。憂と一人きりって言つのは本当に久しぶりだ。

「…………」「…………」

なんだらう。憂が料理の手を止めてとつでもこいつを凝視している。睨んでるよにも見えなくもない。

あれ？ もしかして僕と一人きりが嫌だ、とか？ え？

なにそれ。泣きそう。

確かに小さい頃はよく「お兄ちやーん」ってくつづいてたのが、小学校高学年になつたらなくなつたけども。詳しく言つと、憂が小学六年生のときの、7月23日。ショックすぎて今でも覚えてる。

もしかして…嫌われてるの？ 僕。だとしたらすつこい泣きたい。今すぐ泣きたい。

「あのー、憂さん？」

「ひやうつ！」

ええー。なにこの反応。マジで嫌われてる感じじやん。なんかもうショックすぎて声も出ないわ……。

今日は学校が午前中で終わりつ。だから早く帰つてお兄ちやんとお姉ちゃんのお昼ご飯を作らなきや。

あ、紹介が遅れました。憂です。

家に帰つてご飯を作つてると、一人が帰つてきたみたい。もしかしたらどっちかだけつていつ可能性もあるけど、お姉ちゃんはいつもぼわぼわしてるから、登下校のときも一緒にのはず。中学校のときもそうだつたし。

……と思つたら、リビングに入つて来たのはお兄ちゃんだけだつた。

あれ？ お兄ちゃんだけ？ お姉ちゃんは？ お兄ちゃんがいないと登下校できないはずなのに……。……でも、お姉ちゃんももう高校生だもんね。いつまでも一人で登校つていう訳にはいかないよね。

「ただいま、憂」

「おかえりお兄ちゃん。もう少しで出来るからちょっと待つてね」リビングに入つてきたお兄ちゃんにあいさつをします。

……やつぱりかつこいいなあ、お兄ちゃん。お姉ちゃんも暖かくてかわいいし。こんな家族に囲まれて私は幸せです！

……じゃなくて。お姉ちゃん、大丈夫かなあ？ 高校生になつたつて言つてもつい最近まで中学生だつたわけだし、お姉ちゃん最後まで学校への道覚えてなかつたしなあ。不安だなあ。

「あれ？」お兄ちゃん。お姉ちゃんは？

一応、お兄ちゃんに質問してみる。

お姉ちゃんを信じてあげなきゃいけないと今は思ひナビ、やつぱり心配だし。

「すぐに帰つてくるよ」

お兄ちゃんがそう答えた。

お兄ちゃんがそう言つなら大丈夫だよね。うん、私もお姉ちゃんを信じてあげなきゃ。一瞬、間を置いたのが気になるけど。

「そういえば、この家に一人きりつて相当久しふりだな」

「えつ？」

私がお姉ちゃんについて考えていると、お兄ちゃんがいきな

りそんな事を言った。

確かに、そうかもしねない。いつもこの家にはお姉ちゃんがいたし、この家はお姉ちゃんを中心にして回っているようなものだから、一人きりになる機会なんてそうそう無かつた。

お兄ちゃんと一人きり。お兄ちゃんと、一人きり。

はわつ。はわわわわつ。

えつ！？ えつ！？

お兄ちゃんと一人きり！？

この家に！？ 私と！？

年頃の男女が一つ屋根の下にいると言つのは些か世間体的にも倫理的にも問題があるんじやないかと思つたりそもそも倫理つてなんだつてとか慣れない言葉を使った事に自分自身の中で自己嫌悪してみたりあでも一人きりと言つても兄妹だから別に意識しなければ良いんじやないかとか思つてみたりでももつ私の中では意識しないなんて無理だつたり兄妹で意識し合つのはちょっとまずいんじやないかとか思つたりでも意識してるのは私だけだつたつて勝手に納得してみたりそもそも私はなにが言いたかったんだつて自分が言った事に整理がつかなくなつたりああそれくらいパニックに陥つてるんだなあとこんな状況の中でも自分の事を無駄に冷静に分析してみたりつ！

はう～……お兄ちゃんと一人きり……。恥ずかしいようう……。

「あのー、憂さん？」

「ひやうつ！」

お兄ちゃんにいきなり話しかけられて思わず変な声を出してしまつた。

い、いや、今のはお兄ちゃんが悪い。うん。いきなり話しかけるお兄ちゃんが悪い。うん。私は悪くない。

で、でも今のお兄ちゃんに変に思われたらどうしよう。もしかしたら嫌われたかも……。お兄ちゃんに嫌われたら……。

……うわーん。

……なんだろう、この気まずい空間は。

僕が憂に嫌われるんじやないかといつ疑問が、嫌われるんだという確信変わって、約五分が経過した。

あの（僕が話しかけ、憂が奇声をあげた）後、憂はすぐに料理をするのを止めていた手を再び動かし始めた。

「…………」

「…………」

その後もこんな感じで沈黙が続いている。僕からしたら気まずい事この上ない。なんかもうやだ。一刻も早くこの空気を開けねばと先程から諸葛孔明並みに脳をフル回転させていたのだが、しかしそんな簡単にこの状況を簡単に打破する策が思いついたら、高校受験のときに「……就職したら？」と担任教師から面談の際に言われる事は無かつたのだろうと思う。それくらい僕の愚息ならぬ愚脳は世間一般からみると大きく道を踏み外しているのだ。もちろん、残念な方向に。

さて、僕の脳のスペックについて思考して現実逃避したところでの状況はなんら変わる事はない。逆に悪化したと言つても過言ではない。タイムリミットは、憂が昼食になるであろう麺に具材を絡めソースで味付けをして焼いたもの——焼きそばを作り終えるまで。それまでにこの状況をどうにかしなければこの家の中にしばらくの間気まずい空気が流れる事必至だ。それはどうしても避けなければならない。

理由としては姉さんのため……と言うよりは僕のためだ。あのいつもぽわぽわしててふわふわしてて地に足が付いていないような人が家の中の空気が少し変わったくらいで気付くはずがない。そりやあもちろん、姉さんのいる前で僕と憂が大声をあげて喧嘩すれ

ばいくら姉さんでも気付くだろうが、僕が一ーと言つより憂が精神年齢的に大人なのでそんな事が起こるわけがない。これは暗に僕の精神年齢が低いという事を示しているが、実際そうなのだから仕方がない。

まあつまり何が言いたいかというと、あと数分の間に僕がどう動いてどういう結果を残すかによつて今後一ヶ月弱、もしくはそれ以上の期間、僕の精神衛生上どういつ影響が出るかを決まるのだ。なんと責任重大なことか。

と、唐突に僕の愚脳が妙案を思いついた。

そうだ、今はここから逃げれば良いんだ。勇気ある撤退、といふやつだ。一旦退いて策を練り直そう。もともと思いついてないから練り直すも何も無いが。

そんなことをしてもどうにもならない。僕がこれからしようとしてることは敵前逃亡、それと同義だ。この場合は何が敵かは分からぬが。

それは、分かつてゐる。

嫌といふほどに。

そんな事をしたところで、事態は全くと言つていいほど動かない。

それは、あの時に嫌といふほど、知つた。

だけど、動かない代わりに、悪化もしない。

好転もしないし、悪化もしない。言うなればこれは現状維持だ。現状維持は僕の、いや僕の尊敬し敬愛する友人の得意技だ。今回はそれを真似てみよう。

よし、思い立つたが吉田。即行動に移そう。

「……憂？」

「ひやつ！」

「……うわお。予想外の反応だ。なんというんだろうか、こう

……拒絶反応みたいな。そんなに僕と話すのが嫌なのだろうか。

「あの、さ。さっき姉さんがすぐに帰つてくるって言つただろ？」

「うん」

「おお、話を聞いてくれている。話を聞いてくれない程までには嫌われて無いようだ。だが、油断は出来ない。」

「そつは言つても心配だからさ、見てくるよ。家に辿り着けるか分からないし」

「う、うん……」

憂がなにか腑に落ちないような顔をしてくる。僕の作戦がばれたか？ いや、そんなはずが無い。いくら完璧超人の憂とはいえ、読心術は身につけていないはずだ、多分。そう言い切れないのが怖いんだけど。

「じ、じゃあ、行つてくるわ」

ばれてる可能性は無いとは思うけれども、万が一という事もあるのでここは三十六計逃げるにしかばばりにここから早いこと退散させてもらひうとしよう。

僕が腰を浮かせた時に、がけや、といつ音をたてて僕がついた十数秒前に通つて来たドアが開いた。

「ふいー、ただいまー。疲れたよー」

「…………」

僕の作戦が塵芥となつて消え去つた瞬間だった。

第2曲目 僕にその意味は到底理解しがたいものだつたのだろう、と思へ。

予想通りというか何と言うか部屋に入ってきたのは姉さんだつた。この場合は帰つてきたと言う方が正しいのだろうが。この人はいつも僕の予想の斜め上をいく行動しかしないな。その行動のせいで大概困惑させられるんだけど。

さて。

姉さんが帰つてきたため、その後待ちに待つた昼食とという流れになつたのだが、憂の機嫌がそう簡単にはあるはずもなく、僕としては非常に気まずい空気の中で食事となつた。

そんな中で食べているとせつかくの『飯もおいしくないんじゃないか、なんていう疑問を持つた時もあつたが、しかし空気の張りつめた感じだけで人間の三大欲求に数えられる食欲が衰える訳もない。どこかで『空腹は料理にとつて最大のスペイスである』なんていうのを聞いたことがあるようなないような気がするのだが、今回のことでもそれを実感した。つまりなにが言いたいかといふと、どんな状況であろうとおいしいものは結局おいしい、ということだ。うん、食べ物最高。だがこの家の中の空気が変わる訳ではないので実にいづらじいことこの上ない。その中で平然としている姉さんには尊敬と皮肉を贈呈しようと思う。

という訳で（どんな訳だ）今は僕は今日の全てのイベントが終わつた後の自室にいる。まあ、今日はもうあの気まずい空間に放り出されることがないという空間だ。ああ、平和万歳。

と、ふと自分のベッドに横たわりながら考える。

なぜ、いきなり憂の機嫌が悪くなつた、嫌われはじめたのか。いや、そりやあ嫌いになることに理由は要らない。人を好きになるのに理由がいらないのと同じで。でも、理由はなくともきっかけはあるはずだ、と考える。

ふむ、ではそのきっかけはなんだろうか。

もちろん、憂の気分がそんな気分だったとでも言つてしまえばそれまでだし、これから使う脳の容量を削減できるのでできる限りそうしたいのだが、僕の性分としては謎のままで置いておくのは嫌なのだ。分からぬことがあつたら分かるまでその謎をつきつめる、それが僕という人間なのさ！ 嘘だけれども。事実無根だけれども。しかしあるそう嘘を交えての決意をしたところで簡単にそのきっかけが思いついたらこんなところで物を考えてない。以前にも言つたが、僕の愚脳は世間一般から残念な方向に大きく道を踏み外しているのだ。

…………ああ、鬱だ。憂に嫌われるとか……。そんなことを言うとシスコンだとが言われるけど、別に今さらそんなこと良い。そんな周囲の身勝手な僕への評価よりも、憂の好感度の方が僕にとってはかなりの割合で重要だ。だつて、シスコンですから、僕。

無駄な宣言をしたところで何もやることはないので、歯を磨くために体を起こす。憂のことは今のところは置いておこう。僕としてはかなり気が気じやないけど、今日は現状維持と決めたのだからそのように行動しよう。僕の座右の銘は有言実行です。純度100%の嘘だけだ。

実際はもう眠気が僕の体の中で飽和量を超えたからだ。どんな大きな悩み事を抱えてても眠気には勝てない。昼食の時も思つたけど、三大欲求には敵わないな。うん。

よつ、とベッドから降りて部屋のドアを空けに向かつた時、こんこん、と部屋のドアが音を出した。僕の部屋のドアには勝手に音が出るような役に立つのか立たないのかよく分からぬ機能は搭載さ

れてないので、多分ノックされたのだろう。我ながら遠回りな物の考え方だな。

さて、ノックしたのは誰だろ？か。と考えるまでもなく僕の中では答えは出ている。

今、この家には両親はいなくて、憂には絶賛嫌われ中なので、つて自分で言つて悲しくなるな、これ。まあ、そんな事情なのでこの部屋のドアをノックするのは姉さんだけのはずだ。

という結論をまとめてドアノブに手をかける。

「お兄ちゃん……起きてる……？」

「うおい。まさかだな。

いきなりドアの向こうから声をかけられた。幽霊の声が聞こえるなんて能力は無いので、ついさっきこの部屋のドアをノックした人物なのだろう。で、その人物というのが……。

「う、憂……？」

「な、何……？」

憂だった。

何故？

という疑問が頭の中を駆け巡る。なに？ あまりに嫌いすぎて嫌がらせしないと済まないとか？ 既にぼろぼろな僕の精神に、それを知つていながらとどめを刺しに来たとか？

うん、どれにしても覚悟した方がよさそうだ。

「お兄ちゃん、部屋の中……入つてもいい？」

「へ？ あ、ああ……」

僕は戸惑いながら憂を部屋の中に招き入れる。

説明しておくと、僕の部屋の中はベッドと机とその上にノートパソコンという実に質素なつくりだ。しかも、僕の家族の基本的な生活空間は揃つて集まれるリビングなので、この部屋にいる割合は家にいる時間の3割程度だ。ベッドはその上で寝る、という本来の使い方に則した方法でしか使ってない。ここで一つ補足しておくと、僕には睡眠をとる以外の意味の『寝る』という行為を共に行つてくれ

れる異性はいない。有り体にいえば、彼女いない歴＝年齢ということだ。それに机は専らパソコンを使うときにしか使っていない、と言つてもシスコンである僕からしたら一人で部屋にこもつてパソコンを使つていてるよりは姉さんや憂と話している方が楽しいと考えている。よつてその時間は極端に低くなる。ちなみに、机の本来の使い方である勉強については全くと言つていいほど、というか全くこの机では行つてない。僕ほどになると学校の授業だけで事足りるのさ。…………すいません、嘘つきました。僕はそれほど学校の成績が思わしくないです、はい。そんな僕がなんで家で勉学に励んでいないのかと云つと、家での僕は『我が辞書に勉強の文字は無い！』状態だからである。中学校の頃は、僕の幼馴染でとても成績優秀な女の子に定期テストの度に双子の姉弟共々お世話になつていたため、それほど困ることはなかつた。その子とは高校も同じなのでまたそれでいいか、と考えている僕であつた。

僕は誰に向かつて説明しているのだろうか、なんてことを考えながら憂を僕のベッドに座らせる。僕は自分の机の椅子に。

僕が座つたところで訪れる、変に張り詰めた、少しでも動かしてしまえば今にでも音を立てて弾けてしまいそうな緊張感。これは今日一日家中を満たしていたもの。僕の精神衛生上よろしくないとされるものだ。

もしかしたら憂の方から僕の部屋に来てくれるという行動で歩み寄つて来てくれたからこの雰囲気をもうお世話にならなくていいかと思つていたのに、世界の法則からは逃げられなかつたということだね。

要するに人生はそんなに甘くないんだ。なんて僕が言つ資格は無いのかもしぬいけど。

その時、急に、唐突に、表現の仕方はいろいろあるけど、とにかくいきなりこの部屋を満たしている僕の精神衛生上よろしくない緊張感を破つたのは憂の一言だった。

「お兄ちゃん…………怒つてる？」

はい？

これがたつた今僕のベッドに座つてゐる妹から発せられた言葉です。意味を理解すると、憂は僕が怒つてゐるかどうか聞いてきた、と。僕が、怒つてゐる？

何故？

そりやあ、この家の空氣にあてられてただでさえ狂つてゐる僕の脳みそがちょっと、いやかなりの割合で壊れでいるけれども、しかし僕が認知するかぎりは僕は怒つていない、と思う。僕が多重人格だったら別だけれども。

僕が頭の中で疑問符を発している旨を憂に伝えてみると、
「だつて、お昼の時にお兄ちゃん、お姉ちゃんを探しに行く、とか言つて家の中から出でていこうとしたでしょ？ それに、その後もずっと黙つてゐるし、もしかしたら、私の事、嫌いになつて、怒つて、るの、かなあ、つて」

そう返してきた憂に憂の目には涙と思しきものが溜まつてゐた。今にも零れそうだ。

それにして、お昼のあれの目的がばれていたとは。そんなにいろいろ出来て、そのうえ人の心を読めるなんて君、警察になれるよ。もしくはなんでも屋。確かに僕の知り合いにもなんでも屋っぽいのがいたけど、あの人自分の事なんて言つてたつけ。まあ、いいか。さりげなく自分の思考を脇道にそらせん僕。こんなことでもして自分のペースを取り戻していかないと、目の前で妹が泣きそうになつてゐるなんてシチュエーションの中じゃパニックに陥るかもしれないからね。

……よし、落ち着いてきたところで現状確認といひ。

今は僕の部屋の中で、憂と僕の一人きり。うん、よし。ここまで理解できる。

次に、憂は僕のベッド、僕は自分の机の椅子に座つて向かい合つてゐる。ここもお一ヶ一。

問題が次。憂は僕が憂の事を嫌いになつて、なおかつ怒つてゐる

のではないかと言い、涙腺崩壊直前。ここがいまいち理解できない。だけど、僕の足りない頭をフル稼働させると、憂の言つた言葉の意味はあるで、まるで僕が憂の事を嫌いになつたつて

「心配、なの？」

「…………うん」

憂は少し間を置いて頷いた。その瞳からはすでに涙が零れている。僕が憂の事を嫌いになる。

そんなことを気にするということは、一般的に考えて嫌われたくないということだろう。憂が世間から掛け離れた存在なら、これは当然嵌まらないのだろうけど、憂はこの家一番の常識人だからね。この考へで合つていいのだね。そうすると、僕は嫌われてはない、ということになる。

そう考へると、今日の事は僕のはやとちりだつたのか。まずは一安心。

僕は軽い笑みを浮かべ立ち上がる。

「…………お兄ちゃん……？」

困惑している憂の横、つまり自分のベッドに座り、そして憂の頭を撫でる。

「大丈夫。僕が憂のことを嫌いになることは無いから」

「…………本当？」

「もちろん。どこの世界に妹のことを嫌いになる兄がいる?いや、もしかしたら世界中探したらいるのかもしれないけれども、少なくともこの僕は違うよ」

僕の口から出たとは思えないような言葉の数々。多分、後で自己嫌悪することだろ?。うわっ、恥ずかしいな、僕。

「…………本当に?」

「本当だつて。それより僕の方も勘違ひしてたみたいなんだ。僕が憂に嫌われてしまつたんじやないかつてね」

「そんなこと……?」

「うん、わかつてゐよ。だから言つただろ? 勘違ひだつて。…………

「ごめんね、心配させて」

「…………お兄、ちゃん…………」

憂はいきなり僕に寄りかかり、そして僕の胸で泣いた。

僕は、そうしていいのかは分からなかつたけど、今にも壊れそうだつたつたひとりの少女を、僕の力で壊さないように、でもしつかりと、抱きしめてあげた。

涙の勢いが増した、気がした。

その涙が悲しさからの涙だつたのか、嬉しさからの涙だつたのかはたまた違う意味の涙だつたのかは、本人にしか分からぬし、本人にも分からぬんだろう。

でも、少なくとも、僕にその意味は到底理解しがたいものだつたのだろう、と思う。

まだ涙を流し続ける憂をその腕に收めながら、僕はついさつき僕が言つた言葉のことを考えていた。

“僕が憂のことを嫌いになることは無い”

自分で言つてて實に安っぽい言葉だなと思つ。

人が生きてく上で感情が動くことなんていくらでもある。それが好きになるという正の方向でも、嫌いになるという負の方向でも。もちろん、どんなに愛しい人でもどんなに大切な人でも負の方向に動くこともある。それが一生ものか、その時の一時的な物かは別にして。

故に、“嫌いにならない”なんてことは無い。そんなことありえないんだから。

「いや、僕はそれ以前の問題か…………」

僕は一人呟く。

好きになる、ということに理由やそれ以前の感情は絶対にない、とは言えないが少なくともあってもなくても同じことだらう。一日

ぼれ、なんて言葉もあるんだから。

だが、嫌いになる、ということに関してはそうなる以前に何かしらがあったと考えるべきだらう。一目ぼれはあっても、一目見た瞬間に嫌いになることは稀だらう。嫌いになる過程に何かしらの感情が働いているはずだ、と思う。それが好きなのか別のものなのかは知らないけど。

自分から相手に歩み寄ろうともしてないのに、嫌いになるもない。いや、嫌いになれない。嫌いになるなんて身勝手なことをしてはいけない。それ以前になんの感情も持っていないから。

「本当、いやになるなあ」

自分で自分に吐き気がする。

そんな資格もないことは分かつてる。

自分で勝手に物を考えて、勝手に自己嫌悪する。このことがどんなに身勝手なことか。僕は体をもつて知つている。また、文字通り。

確かに幼稚園に通つっていたころに、『やられて嫌なことは、人にしつはいけません』なんてことを先生から聞いた記憶がある。たしか年中だつたと思う。今思えば僕が素直に教育というものを受けたのはここまでだつたのかもしれない。当然、その当時幼稚園児だつた僕はこの言葉の意味を理解していなかつた。というよりこの言葉を幼稚園児で理解できる人間は少ないだらう。もしかしたらいいかもしれない。

まあ、そんなことは置いといで。

僕がこの言葉の意味を本当に理解するのはそれから一年後。きっかけは僕が壊したこと。

その時の人々の顔は今でも忘れない。

その時の気持ちも今でも鮮明に覚えている。

初めて、壊した。

理由は、よく覚えてないけど、その事実だけが僕の頭の中に残つてる。

僕がこんなことを考えるのは筋違いかもしれないけど、あの人は今、笑つていいだろうか。いや、そりゃあ初恋の人にはいつまでも笑つていてほしいと思うでしょ？ ね？

いや、でもそんなことをこの僕が考えるのは、こんな僕が考えるのは、尊敬し敬愛する友人の言葉を借りるのなら、

「戯言、なのかな」

……ああ、駄目だ。眠い。今憂いるけどいいや。もう寝ちゃおう。つて、あれ？ さつきから憂の声が聞こえないな。

そう思つて僕はふと腕の中の憂を見る。そこにいるのは幸せそうな顔で寝息をたててている憂だった。……寝ちゃつたのか。

今は……1時か。寝坊が日課の僕はそれと同じように夜更かしもしてゐる訳で、いつもはこんな時間に寝ることは無いんだけど、普段と違う頭の使い方したからかどうかは分からないけどめちゃくちゃ眠い。

うん。意識が朦朧としてきた。いいや、このまま寝よ。おやすみ、僕。

こやいぢいぢいぢいぢいぢ。これは無いって。どれくらい無いかと言つと、フルマラソンした後にもう一回フルマラソンするくらい無い。

なんて言つ風に現実逃避したくなる今の時刻は午前6時34分。朝だ。早朝だ。いや、誤解しないでほしいが、毎朝この時間が現実逃避したくなるのではなくて、今僕が現実逃避したくなるのがこの時間だったと言つただだ。

さてさてそんな状況がどんな状況かと言つと、

「…………」

ちなみにこの声は僕のではない。

今、僕の目の前にはとある人物がいる。

息がかかりそうな、というより実際に息がかかってる顔と顔の距離。

何故か抱きかかえるようにその人物の腰にまわされた僕の腕。

かなり密着している一人の体。

そして、感じられるのは女の子独特の柔らかさ。

この状況が自他ともに認める紳士である僕でなければ襲われても仕方が無いんじゃないかな、とか心配してみたり。現にこの子はとっても美少女な訳で、紳士である僕でさえも精神ががりがり削られてしているのが分かる。

それに、たつた今この子と密着している場所がよろしくない。

その場所とは　　すばり、ベッドの中。

少しでも知識のある人なら、「え？ 何かあったの？ というかあつたんじよ」とでも誤解されそうな、誤解してくれとでも言つているようなシチュエーションだ。

ここで僕に毎朝起こしてくれる幼馴染の女の子がいたのならこの光景を見た瞬間、「ば、バカあああ……」とでも言つて僕を殴りこの部屋から飛び出していくことだらう。僕にそんな子いないけど。全部妄想だけ。

でもまあこの僕が、周囲の認識で実に急け者であるという僕が一人で起きられるはずもなく、誰かに起こしてもらつているという点では僕の妄想も事実を告げている。

紳士で急け者な僕。うん、いいんじゃないかな。とは言つてもここで否定すると僕の存在 자체を否定するという非常に鬱屈した人間になつてしまふのでそんなことしないけど。

さて、話を戻そう。

起こしてもらつているということは、つまり起こしてくれる人がいるという訳で、その人物がいなければ、じゃあお前は何だかわからぬ存在に起こしてもらつているのかなんていうことになつてしまふ。

もしかしたらそのなんだかわからない存在が実は宇宙人で、僕を

アブダクションする機会を伺っているなんてこともある。だけど僕が起こしてもらっている人物はちゃんとした人間なので、その点では安心だ。なんの安心だい。

やばいな。心中で一人ツツコミするほど焦つて。結構重症だ。

……ん？

ふと考えただけど、例えはいつも自分の事を起こしてくれる人よりも早く起きてしまった場合はどうすればいいのだろうか。日頃の感謝を込めて起こしてあげればいいのだろうか。だけど、この問い合わせに答えられる人は少ないのだと思う。なぜなら、起こしてくれる人は起こさなければならぬ人よりも早く起きるから、その人の本意にしろ不本意にしろ起こす、という役を受けているのだから。

今、僕がこんな問い合わせをしたのにはもちろん立派な理由がある。まさに今、僕がそんな状況なのだ。詳しく言うと起こされる側の僕が起きていて、起こしてくれる人が寝ている状況。しかも僕の間近で。まじか、とでも言いたい気分だ。……面白くないな。

では、さんざん先延ばしにしていた僕を起こしてくれる人とは誰だろうか。今現在、この家には三人しかいない。僕と憂と姉さんだ。そしてその中で物理的に考えて僕を起こすことが出来るのは二人。まあ、つまり憂と姉さんだ。そりやあ、僕が僕自身を起こすなんていう人類の英知を遙かに超え、常識を覆すような事が出来るのならば別だけれども、僕は至つて普通のどこにでもいるような紳士だ。そんなことはできない。

そして、その一人の中で常識的に考えて僕を起こすことが出来るのは憂だけだ。姉さんに人を起こすという事が、それ以前に人よりも早く起きるなんていうことが出来るはずが無い。そんなの、天地がひっくり返つても無理だ。僕もだけど。

そんな訳で、普段は憂が起こしに来てくれるはずなんだけど。

「いやいやいやいや、これは無いって」

僕は情報整理と脳内の情報の検索を同時にいながら溜め息混じりに呟く。とは言つても僕の脳がそんな並行した作業に耐えられる

はずがないからどうちかに偏つちやうんだけど。

なに？ やつちやつたの？ やつちまつたのか？ 昨日の僕。い
くら健全な年頃の高校生でその辺の欲求があるとは言つても、そし
て田の前の子がいくら美少女だと言つても、妹に手をだすとは！
見損なつたぞ僕！

……はあ。この後の人生が容易に想像できる。このまま憂に
告発されて、裁判では情状酌量の余地なく問答無用で有罪。その後
刑務所行き、か。これはもう終わったかな。僕にしては華々し過ぎ
る最期かもね。

……いや、ちょっと待てよ。憂もここで寝ていいということは
同意の上、か？ いや、それはもつとまずいだろ。なにそれ。ど
このHログー？ やばくない？ 世間の目とか倫理的な意味で。
さてもう僕がこんなに焦つている意味がお分かりだと思うが、僕
の田の前で幸せをうに寝てているのは我が妹、憂である。

「…………」

……ああ、かわいいなあ。もつこいつのことこのままがゆつてし
たいなあ。……じゃなくて。僕は思考を現実に引き戻す。

うーん。この後どうしたものか。憂を起こす？ いや、やめてお
こづ。なんか危険な気がする。えーっと後は…………。
…………もういいや。一度寝しよつ。

……うつして社会不適合者が生まれていくのか。なんてことを自分の
ことながら他人事のように考へていていた。

「お前や、部活なに入んの？」
「いや、まだ考へて無い」

時は飛んで今は学校の昼休み。友人と楽しい昼食タイムである。
ちなみに今日の朝はといえば特に何もなかつた。憂となんやかん
やあつたんじやないかという僕の推理は、「お兄ちゃん、ごめんね

……昨日急に寝ちゃつて……」という憂の言葉によつて崩された。ほつとしたような残念なような。憂との関係も無事修復できた。僕としてはもつと長期戦になると思っていたので、万々歳だ。

まあまあそんな訳でそのことについて友人と談話中なのである。

「まあ、お前と憂ちゃんだつたらありえるかもな」

「何を失礼なことを。僕は自他共に認める紳士だというのに」

『僕』紳士という構図に待つたをかけたのは、中学からの友人の佐竹春樹。何を隠そうこの春樹こそが『ハーレム作れるぜひやつほー！』な、浅はかでアホで嘆かわしいやつである。とはいってもいつもそんなオーラが体中から溢れ出ている訳ではない。実はこの友人、スポーツは出来るわ勉強はできるわそれに顔もいいわで、周りから見ればほぼ欠点が無いような人間なのだ。ぶつちやけてしまえば猫を被つているのだ、この男は。恨めしいことこの上ない。憂といい春樹といいどうしてこうもぼくの周囲には完璧超人が集まるのだろうか。誰かの陰謀を感じずにはいられない。

ああ、それにしても春眠暁を覚えずとはよく言つけれども、なんだつて春はこんなにも眠いのだろうか。うーん、このまま寝れそうだな。僕はつくえに突つ伏す。

「僕もうだめだよ、パトラッショウ……」

「誰がパトラッショウだ。全く、お前はいつも寝てばっかだな」

「睡眠欲つていうのは人間の三大欲求の一つだからね。何を差し置いてもその欲を満たそうとするのは本来人間にあるべき姿なのさ」

「はいはい、お前の持論は分かつたから。で、次音楽だぞ」

「分かつてるよ……おやすみ」

「わかつて無いじやん。先生に怒られても知らんぞ」

最後の方春樹がなにを言つてたのかあまりよく聞き取れなかつた。音楽つてどこでやるんだつけ。などと考えながら僕は本日の昼寝タイムへと突入していった。

その後、音楽の山中さわ子先生に怒られたのは余談である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8375s/>

けいおん！～マネージャー物語～

2011年10月7日22時22分発行